

レジリエンス研究における和辻風土論の寄与

——生の哲学との比較と「旅行者の体験における弁証法」——

太田和彦

本論文の概要

本論文は、地域の社会システムのレジリエンスの向上に向けた取り組みにおける、和辻哲郎の風土論の可能性を検証したものである。予期せぬ事態が生じたときに柔軟かつ弾力的な対処を行うためには、自然と社会がそれぞれ独立したシステムであるという二分法を越えた想像力を育む必要がある。これを満たす観点として、今日、和辻風土論や今西自然学が注目されている。しかし、レジリエンスの向上に資するとされる根拠の明示と検証は十分に行われていない。

この理論的検証にあたり、本論文は風土の類型化における隠喩の機能に注目した。今日、隠喩は単なるレトリックにとどまらず、複雑な状況を把握し、共有する手法として研究が進められている。そこで、本論文は風土の隠喩化・類型化するプロセ

ス（複数の関係者による共同作業）そのものが、レジリエンスを向上させる手法であると位置づけた。そして、この位置づけを実践の場に資するものとするために、次の二つの問いを検証した…**A** 和辻風土論における、風土の隠喩化・類型化を、より広い思想史のなかで他の思想家との関連づけて検討することは可能か。**B** 和辻風土論を理論的枠組みとして用いることで、自然と社会のあいだの相互構築作用とレジリエンスの研究にどのような新しい提案が可能となるのか。

これらの問いについて、和辻風土論と、生の哲学との比較思想的分析を行い、以下の見解を導いた…**A** 和辻は『風土』とほぼ同時期に書かれた『人間の学としての倫理学』で、ディルタイからの学問的影響を述べている。和辻とディルタイの共通点として、合理的思考では捉えきれない事柄を理解する方法として解釈学をとる点があげられる。両者において、解釈の対象

は、単に言語的なテキストにとどまるものではなく、「生」——個々の人間と世界とを包摂する連関の総体、和辻においては「間柄」——の表出としての世界の各部分に及ぶ。ただし、ディルトアイが文化的形成物を解釈の対象としたのに対して、和辻は、自然と社会のあいだの相互構築作用の結果としての、家や衣服、交通、山林などを解釈の対象としている。ディルトアイとの共通点をふまえれば、風土の隠喩化・類型化をより広い思想史のなかで検討することが可能となる。B 和辻風土論を理論的枠組みとして用いることで、相互構築作用とレジリエンスの研究に、異なる風土の地域を訪問することの効果提起することができる。風土を自覚するためには異なる風土を訪れる必要があることについては「旅行者の体験における弁証法」として理念化されている。この訪問の効果の理論的示唆は風土論に特徴的なものである。

以上の研究成果は、レジリエンスと自然と社会の相互構築作用の研究を、ツーリズム研究や、カントの「訪問権」の議論、そして和辻のコスモポリタニズムに関する研究と結びつける補助線となることが期待される。

一 時事的背景、先行研究、具体的課題

今日、人間の諸活動によって排出される炭素や窒素、生物多様性の減少の影響は、地球上のあらゆる空間に及んでいる。ポール・クルツツェンは、この状況について、小惑星の衝突

や火山の大噴火に匹敵する地質学的な規模の環境変化を人類の活動がもたらしたことを表わす新造語として「人新世」(Anthropocene)を提唱した¹⁾。人新世という枠組みは、これまで私たちが前提としてきた、暴れない気候のなかで創造的な未来を打ち立てるという完新世的な思考を問い直し、²⁾ 諸学の洗練された連携と新しい倫理を強く要請するものとして位置づけられている³⁾。

この安定した自然条件を望めない状況において、地域社会に求められている事柄の一つが「レジリエンス」(resilience)である。レジリエンスとは、困難な状況下で、一時的に不適応的な状態に陥ったとしても、そこからうまく回復する過程や能力、および適応の結果を指す用語である。主に、弾性、回復力、柔軟性という訳語が当てられる。レジリエンスの概念は心理学においてよく用いられているが、現在は、一人の人間の精神的・肉体的健康にとどまらず、企業や行政などの組織、世界経済に至るまで、あらゆるレベルのシステムに適用されている。二十世紀後半から現代に至る過程で見られる、社会的・技術的・生態的条件の、適応することが困難なほどの非常に速い変化のなかで、持続可能な、より良き生を作り上げていく基礎としてレジリエンスの概念は重要視されている。レジリエンスの向上を目指す取りくみにおいて強調されるのが、社会と技術と生態系のあいだの相互作用である⁴⁾。人間の影響から独立したものであるの自然と人間社会という二分法的観点は、レジリエンスの向

上の障壁として働くことが指摘されている。⁵⁾

この自然と社会のあいだの伝統的な二分法の問い直し、両者の相互作用を表す新しい観点を探求する分野として環境学的人文学が要請されているが、この要請に応えうるものとして、オギユスタン・ベルクやマーティン・プロミンスキは、和辻哲郎の「風土」概念と今西錦司の「自然学」に着目している。ベルクやプロミンスキが注目するのは、和辻と今西において共通する、人間を含めた生物の主体性を起点として環境あるいは自然の特有化がなされるが、一方で当の主体性もまた環境あるいは自然が構築の契機となっているという観点である。プロミンスキは、和辻の風土論、今西の自然学が、人新世におけるレジリエンスの向上に向けた施策の理論的枠組みの一つになりうるという見解を示している。⁶⁾

しかし、レジリエンスについて考察する際に重要なのは、レジリエンスは外形的・制度的な評価がしにくく、例えばSDGs（持続可能な開発目標）のような、管理のための単一のフレームワークや目標を作ることが困難であるという点である。⁷⁾ レジリエンスは定義上、予期せぬ事態や攪乱が生じた後でなければそれを評価することができない。また、レジリエンスが論じられる際には、対応するべきリスクがあること、そして「回復」や「良い適応」とされる状態があることが前提となるが、それらを特定の評価軸のもとで表現することは難しい。そのため、レジリエンスの向上において必要なのは、知識の拡張にとどま

らない、想像力の拡張であるといえる。予期せぬ事態が生じたときに柔軟かつ弾力的な対処を行うためには、自然と社会がそれぞれ独立したシステムであるという二分法を越えた想像力、意図と実現、予測と対処、過去―現在―未来が数直線状に連なる時間認識から外れた出来事を了解する想像力を育む必要がある。

だが、プロミンスキをはじめ、レジリエンスの向上における予期せぬ出来事を理解する想像力と、和辻や今西の議論を結び付けて論じた研究はほとんどない。そこで本論文では、紙幅の都合上、和辻の風土論に限定し、主体との関係を予め合理的に想定することができない外部の受け入れのあり様が和辻の風土論においてどのように理論的に包摂されているかを検証する。

この理論的検証にあたり、本論文は、風土の類型化における隠喩の機能に注目する。今日、隠喩は単なるレトリックにとどまらず、複雑な状況を把握し、共有する手法として研究が進められている。複雑な関係性の可視化（より正確に言えば、複数の関係性の各々の記述の総合としての可視化）を成立させるうえで隠喩は不可欠であり、理解に一定の傾向性をもたらすフレームニング⁸⁾、そして自省と変容⁹⁾にも、隠喩の与える影響の大きさが指摘されている。また、硬直化した組織内の規則、宗教儀礼、法制度、道徳観などを修正・破壊するうえで、隠喩は多面的な機能を果たすことが指摘されている。¹⁰⁾ レジリエンス研究においては、予期せぬ事態が生じたときの各段階（攪乱、吸収、回

復、適応)において、隠喩の活用は、対象のそれまで気づかれなかった特徴を際立たせ、初めて目にする現象についての表現を支え、状況に対して働きかける局面において、大きな役割を果たすと見なされている。¹⁶⁾

『風土』において隠喩は風土の類型化において多用されている。和辻は風土を、モンスーンの、沙漠的、牧場的と三つの類型に分けたうえで、自然と人間、文化のあいだの密接な関連性を述べる。この風土の隠喩化・類型化において目指されているのは、気候と性格のあいだの因果関係の明確化と説明ではなく、理解・了解である。¹⁷⁾ このことは、「人間が己れを見いだすとき、すでに風土的規定の下に立っているとすれば、風土の型はやがて自己了解の型とならざるを得ないであろう。〔中略〕風土の型が人間の自己了解の型である」という風土論の趣旨と重なるだけでなく、今日の隠喩研究において言及される隠喩の機能とも重なる。

そこで、本論文は風土の隠喩化・類型化するプロセス(複数の関係者による共同作業)そのものが、レジリエンスを向上させる手法であると位置づける。¹⁸⁾ この位置づけを実践の場に資するものとするためには、次の二つの問いを検証する必要がある。A和辻風土論における、風土の隠喩化・類型化を、より広い思想史のなかで他の思想家との関連づけて検討することは可能か。B和辻風土論を理論的枠組みとして用いることで、自然と社会のあいだの相互構築作用とレジリエンスの研究にどのよ

うな新しい提案が可能となるのか。

これらの問いに対して、本論文では和辻風土論と、ディルタイやベルクソンに代表される生の哲学(Lebensphilosophie, philosophie de la vie)との比較思想的分析を通じて検討を行う。Aに対しては、和辻風土論と生の哲学の共通点から、Bに対しては、和辻風土論と生の哲学の相違点から、それぞれ考察を進める。

二 比較分析

A 体験に即した人々の生の了解の必要性——和辻風土論と生の哲学の共通点からの検討

和辻風土論における、予め合理的に想定することができない外部を受け入れる態度・生のあり様を検討するうえで、着目されるのは、大正期における「生の哲学」の流行からの影響である。和辻の人格主義——超越的な神ではなく、この世界に遍満する生命が価値の源泉となることを特徴とする¹⁹⁾は、ベルクソンやニーチェの読書体験を出発点としており、²⁰⁾ ハイデッカーの道具的連関のように、人と人が作り上げる実践の世界を、存在を理解するための単なる通過点として捉えるのではなく、生命に満ちた空間として積極的に捉えねばならない、とする当時の和辻の姿勢は、日常的活動に現れる表現の解釈を通じて人間のありようを理解すべきであるという『風土』の主張と連続している。

ただし、和辻に影響を与えたのは大正期に広く受容がなされたベルクソンではなく、デイルタイである。和辻は『風土』第四章でデイルタイの芸術論に簡単にふれているが、デイルタイの言語を生の表現と見なす解釈学的方法が和辻の風土論に与えた影響はより広範なものと見なせる。先述したように、風土の類型が、人間の自己了解の型であること（分析、説明のための手法ではないこと）の強調からは、デイルタイの精神科学への

依拠がうかがえる。また、『風土』とほぼ同時期に書かれた『人間の学としての倫理学』第一五節では、「デイルタイの説く生・表現・了解の連関は、その「生」が人間存在として把握せられるときに、その優秀なる方法的意義を發揮し来たると思う。表現はあくまでも個人的であるとともに共同的であるところの生の表現である。意識的努力において把握し得られない主體的な人間存在は、ただ表現においてのみ己れをあらわにする。すなわち意識せられるよりも先に表現せられ、表現を通じて初めて意識にもたらされ得るのである。ここに主體的実践的な人間存在を主體的に把握する道が与えられている」と述べ、家や衣服、交通、山林などに、人間の生の表現を、間柄として読み取り、了解する、解釈学的方法を論じている。和辻はこのことについて「間柄の表現形態を重要な手がかりとして用いることは、我々の倫理学を社会学に近接せしめる」と述べているが、社会学への近接以上にデイルタイの生の哲学（共同的な歴史的・文化的世界の内部に成立する「生」についての哲学）への近接で

あり、そしてその拡張でもあることは重要である。ただし、デイルタイが様々なテキストや芸術作品のなかの生の表現を解釈学的対象とした一方で、和辻が自然と社会の相互構築作用の産物としての家や衣服を対象としたことの意味については、今後、別途検討の余地がある。

B 「旅行者の体験における弁証法」——和辻風土論と生の哲学の相違点からの検討

一方で、和辻は、隠喩を介した人間の生の表現の理解がなされる場所の局在性に意識的であり、この点は、ベルクソンはもちろん、デイルタイやニーチェなどの和辻が味読した生の哲学に分類されるところの思想家においても見出すことができないう、和辻風土論の特徴と位置付けられる。『風土』においてその局在性は、風土の自覚には異なる風土を訪れる必要があるという「旅行者の体験における弁証法」²⁶として表明される。この異なる風土の地域を訪問することによって生じる効果に関する言及と考察は和辻風土論に特徴的なものであり、風土論を理論的枠組みとして用いることで、相互構築作用とレジリエンスの研究に新しい提起を可能にするところのものであるといえる。

和辻において、人は自身の異なる文化を体験する「旅行者」として、予期せぬ事態、異なる風土と出会い、それを比喩や類比を用いて理解しようとする。和辻は「人間は必ずしも自己を自己において最もよく理解し得るものではない。人間の自覚は通例他を通ることによって実現される」と述べ、次のように続

ける。「しからば沙漠的人間の自己理解は霧雨の中に身を置くことによって最も鋭くされるであろう。このことは沙漠的ならざる人間が旅行者として具体的沙漠に接近し得ることを立証するものである。彼は沙漠において己が歴史的・社会的現実のいかに沙漠的ならざるかを自覚するであろう。が、この自覚は沙漠の理解によって可能となるのである。たといこの理解が旅行者としての一時的な沙漠生活にもとづくとしても、それが沙漠の本質的理解である限り彼はそこから歴史的・社会的なる沙漠に「入り込んで生きる」ことをなし得るのである。旅行者はその生活のある短い時期を沙漠的に生きる。彼は決して沙漠的人間となるのではない。沙漠における彼の歴史は沙漠的ならざる人間の歴史である。が、まさにそのゆえに彼は沙漠の何であるかを、すなわち沙漠の本質を理解するのである」²⁷⁾。

人間と自然の相互構築作用を記述する和辻の風土論において、生の哲学を思想的背景として風土論に導入された、意図と実現、予測と対処から外れた予期せぬ事態の考察は、砂漠や霧雨のなかとといった〈この場所〉で局在化して形をなすものとされる。予期せぬ事態は、〈この場所〉での体験や直感として生じるという和辻風土論の主張は、『風土』の草稿にあたる「国民性の考察」ノートにおいて、風土の類型の箇所が、当初はより和辻が外遊先で遭遇したより生々しい驚きと共感の列挙であることをふまえるとよりわかりやすい。²⁸⁾例えば、草稿における「i」のような記述は、『風土』において「ii」のように書き直

されている。

「i」支那、印度の国土は自分として予期しない光景を示しはしなかった。自分に対して在来全然予期しなかった印象を与えたのは、アラビアの南端アデンの町であった。自分をまず驚かせたのは、町の背後に立っている山である。その山が自分の曾て経験しなかった様な異様な、物凄、暗い感じを与えた。自分はこの不思議な感じを分析して、それがこの山に一本の草木もないといふ事に起因してみるのを見出した。「中略」全然生の力を感じさせぬ、云はば骨を見る感じであって、強く〈死〉の気分を印象させられる。それが一々の山の輪郭の線にも光の光り方にも、そのどす黒い色にも、悉く現れているのである。そこから物凄、陰惨な感じが発生してくるに外ならぬ」²⁹⁾。

「ii」アデンの陰惨な山は旅行者に対して沙漠の本質を「乾燥」として開示する。このことは沙漠について語る限り多くの人左の言い古したことである。にもかかわらず旅行者をして事新しく驚異を感じしめるのはなぜであるか。それは彼が初めて「乾燥」を生活したからである。乾燥は湿度計・寒暖計によって示される空気のある湿度ではなくして、人間の存在の仕方だからである」³⁰⁾。

『風土』の記述だけを読むとわかりにくい、和辻自身が異なる風土性の地域で遭遇した驚きと共感、直観と体験は、風土の類型という隠喩の起点となっている。このことは、異なる風土性の地域を訪れるなかで、予期せぬ事態によって生じる攪乱

が、言語の柔軟性によって吸収されて隠喩となり——異なる風土性に接したときの驚きと共感が、隠喩の活用によって類型化されたように——、レジリエンスの発現そのものと同時に、隠喩を介した想像力の拡張——ある地域における攪乱からの「回復」、「良い適応」としてどのような状態を措定するか——を促すものであることを意味する。自然と社会のあいだの相互構築作用とレジリエンスの向上を、「旅行者の体験における弁証法」として異なる風土性の地域への訪問において結びつける視点は、和辻風土論によって新しく提起できるものといえる。⁽¹⁾

三 今後の展望

以上の研究成果のうち、特にBの「旅行者の体験における弁証法」に関する再考察は、レジリエンスと自然と社会の相互構築作用の研究を、ツーリズム研究や、カントの「訪問権」⁽²⁾の議論、そして和辻のコスモポリタニズムに関する研究と結びつける補助線となることが期待される。

また、和辻は風土の類型化以外の個所で、隠喩をそれほど積極的に用いていない。坂部は、和辻の著作の全体を見ても、隠喩を組み込んだ理論的考察は、西田幾多郎や三木清に比べると徹底されているわけではないと指摘しており、木岡もまた、和辻の風土論の最大の着眼点を、他者との出会いの場において、自他が互いを隠喩として用いる自己発見の論理としての〈アナロジーの論理〉と位置づける一方で、比喩や類比による

外部の受け入れについては、和辻よりも西田や三木に即して考察している⁽³⁾。これらの指摘は風土の類型化が、和辻の多様な仕事のなかで例外的な位置を占めることを示すことを推測させるが、和辻の著作全体、特に倫理学や仏教研究、演劇論における隠喩あるいは類比の用いられ方と傾向性については、和辻の個人史と重ねる形で、別途検討が必要と考えられる。

- (1) Paul, J. Cruzen & Eugene, F. Stoerner, "The 'Anthropocene'", *Global Change Newsletter*, Vol.41, 2000, p.7-18.
- (2) 中川毅「人類と気候の10万年史—過去に何が起きたのか、これから何が起こるのか」講談社、二〇一七年。
- (3) キャスパー・ブルー・イエセン「地球を考える：「人新世」における新しい学問分野の連携に向けて」藤田周訳『現代思想』第四五集（二二号）、二〇一七年、四六―五七頁。
- (4) Patterson, J. et al., "Transformations towards sustainability: Emerging approaches, critical reflections and a research agenda", *Earth System Governance Working Paper*, 33, 2015.
- (5) Erixon, H., Borgström, S., & Andersson, E., "Challenging dichotomies: exploring resilience as an integrative and operative conceptual framework for large-scale urban green structures", *Planning Theory & Practice*, 14 (3), p.49-372.
- (6) クリストフ・ボナイユ、ジャン＝パティスト・フレゾス『人新世とは何か―地球と人類の時代』の思想史（二〇一三年）野坂しおり訳、青土社、二〇一八年。
- (7) オギユスタン・ヘルク「通感」は科学の対象になりうるか？—今西自然学の問題と関連付けて「日本の哲学」第一五集、昭和堂、二〇一四年、一八―二六頁。
- (8) Prominski, M., "Andscapes: Concepts of nature and culture for

landscape architecture in the "Anthropocene", *Journal of Landscape Architecture*, 9 (1), 2014, p-19.

(9) *ibid.*, 9.

なお、和辻風土論は現状把握のための記述的な試みであり、ある環境条件や活動、文化に対して何らかの能動的な改善や働きかけを主張するものではないという点については留意すべきである。

(10) Marchese, D., Reynolds, E., Bates, M. E., Morgan, H., Clark, S. S., & Linkov, I., "Resilience and sustainability: Similarities and differences in environmental management applications", *Science of the Total Environment*, 613, 2018, p275-1283.

(11) 佐藤暁子、金井篤子「レジリエンス研究の動向・課題・展望―変化するレジリエンス概念の活用に向けて―名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要」心理発達科学、六四、二〇一七年、一一一〜一七頁。

(12) ション・アアリー「社会を越える社会学―移動・環境・シチズンシップ」〔二〇〇〇年〕法政大学出版社、二〇一一年。

さらにアアリーは、特定の隠喩が人々に受容あるいは拒絶される基準、および個々人が生きる隠喩の基盤を明らかにすることを、社会学の目標の一つとして位置付けている。

(13) 鍋島弘治朗「メタファーと身体性」ひつじ書房、二〇一六年。

(14) アルベルト・メルツ「ブレインング・セルフ」惑星社会における人間と意味〔一九九一年〕新原道信訳、ハーベスト社、二〇〇八年。

(15) マーティン・フォス「シンボルとメタファー」赤祖父哲二他訳、せりか書房、一九七二年。

(16) Pickett, S. T., Cadenasso, M. L., & Grove, J. M., "Resilient cities: meaning, models, and metaphor for integrating the ecological, socio-economic, and planning realms", *Landscape and urban planning*, 69 (4), 2004, p69-384.

(17) 木岡伸夫「風土の論理―地理哲学への道」ミネルヴァ書房、二〇一一年、一三四頁。または、高野宏「和辻風土論の再検討―地理学

の視点から」岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要、第三〇集、二〇一〇年、三二二〜三三三頁。

(18) 和辻、前掲著、二七頁。例えば、「四季おりおりの季節の変化が著しいように、日本の人間の受容性は調子の早い移り変わりを要求する」(一六三頁)、「あたかも季節的に吹く台風が突発的な猛烈さを持っているように、感情もまた一から他へ移るとき、予期せざる突発的な強度を示すことがある」(一六四頁)といった記述があげられる。

(19) この示唆は、「地域の地理・歴史情報の重ね合わせや関係者からの聞き取りによる絵地図の共同制作などの可視化がレジリエンスの向上に寄与する」という先行研究に基づく。詳しくは、Belay, M. Participatory mapping, learning and change in the context of biocultural diversity and resilience, Rhodes University, 2012; 太田和彦・吉田丈人「災害リスクと可視化の意味―風土論の現代的展開の可能性とEco-DRR」『地球研ニュース』七六号、二〇一一年、四〜八頁を参照。

(20) 荻部直「光の領国 和辻哲郎」創文社、一九九五年。

実際に、最初の著作「ニイチエ研究」、続く「ゼレン・キエルケゴール」の執筆前後の和辻の書簡やノートからは、ベルクソンを愛読し、ニイチエをその生命主義の先達と位置づけていることがわかる。詳しくは、和辻哲郎『書簡』『和辻哲郎全集(第25巻)』岩波書店、一九九二年を参照。

(21) 和辻哲郎「初稿 倫理学」筑摩書房、二〇一七年。

(22) ベルクソン思想の大流行ほどの事件とはならなかったが、ディルタイの著作もまた、彼の没後の大正末期から昭和初期にかけて日本に紹介されたものであった。そのなかでも、和辻が参考にしたのはディルタイの弟子であるゲオルク・ミッシュュによって編集されたディルタイ全集第五巻であることを仲正は指摘している。詳しくは、仲正昌樹『日本哲学』入門講義―西田幾多郎と和辻哲郎』作品社、二〇一五年を参照。

(23) ディルタイは、自然現象のなかに因果関係を見出し、普遍的法則へと帰着させる自然科学と、文化的諸現象のなかに人々の生の表現

を見出し、解釈者自身の生に引き付けた特殊な形で理解する精神科
学を区別した。和辻風土論は後者に依拠する形となっている。

(24) 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店、二〇〇七年、二
二六頁。

(25) 和辻、前掲書、二二二頁。

(26) 和辻哲郎『風土』岩波書店、二〇〇七年、七七頁。

(27) 和辻、前掲書、五四～五五頁。

(28) 戸田行賢「和辻哲郎『風土』形成期における空間性の問題をめぐる一考察―草稿―」における体験記、シュペングレー、ヘルダー、ハイデッガーの取扱い方から見た『津山工業高等学校校紀要』第三集、一九九四年、三三～三八頁。

(29) 和辻哲郎「国民性の考察」（一九二八～一九二九年）国立国会図書館デジタルコレクション、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/253242>
二〇一九年九月三〇日アクセス、三二～三三頁。

(30) 和辻哲郎前掲『風土』五七頁。

(31) 和辻は『風土』において旅行者としての体験を越えた言及を行っていないが、後の『倫理学 下』においては自身の体験を越えた風土についても記述している。この相異の評価については、左記を参照。川谷茂樹「和辻哲郎『風土』における他者理解について…「旅行者」というアプローチ」『北海道大学学園論集』第一二七集、二〇〇六年、二五～四三頁。

(32) 菅沢龍文「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」―カントによる世界市民権概念について―」『法政大学文学部紀要』第七六集、二〇一八年、一三～三一頁。

(33) 太田和彦「批判的コスモポリタニズムと風土論―和辻哲郎とアルフレート・シュッツ―」『比較思想研究』第四五集、二〇一九年、七三～八一頁。

(34) 坂部恵「和辻哲郎―異文化共生の形―」岩波書店、二〇〇〇年、七四頁。「それ自体不可視で、直接には言表不可能な「無の場所」ないしは「超越的述語」の思考に徹したゆえに、比喩や転形（メタモル

フォーゼ）の論理を確保した西田幾多郎や、その影響の下に、構想力の論理を根源的に類比（アナロジー）の倫理としてとらえた三木清らにくらべて、「間柄」の場をひとびとによって形づくられる「よのなか」に限る傾向のある和辻の場合には、彼らのような境地に自覚的に徹することにおいて欠ける点があることは否定できない」。

(35) 木岡伸夫『風土の論理―地理哲学への道―ミネルヴァ書房、二〇一一年。木岡伸夫「へあいだ」を開く―レンマの地平―世界思想社、二〇一四年。木岡伸夫『邂逅の論理―縁―の結ぶ世界へ』春秋社、二〇一七年。木岡伸夫「へ出会い」の風土学』幻冬舎、二〇一八年など。

（おおた・かずひこ、風土論・食農倫理学、

総合地球環境学研究所）